

## 能登半島沖に放流したマダラ人工種苗 1 歳魚の成長と移動分散について (要旨)

森岡 泰三

(日本栽培漁業協会能登島事業場)

日本栽培漁業協会では、1983年からマダラの資源回復を目的に種苗生産技術開発に取り組み、1985年から人工種苗の放流追跡調査を実施してきた。

本報告では、満 1 歳まで水槽内で養成した後、放流し、再捕されたマダラ種苗から得られた成長と移動・分散についての知見を取りまとめた。

放流に用いたマダラ種苗は、1994年に生産し、能登島事業場の冷却水槽を使用して種苗の越夏養成を行い、満 1 歳になったもので、1995年2月に富山湾で1000尾を放流し、1997年の春までに79尾が再捕された。これらの結果を用いて種苗の移動・分散の状況を推定した。また、再捕魚のサイズから成長を推定し、さらに成熟の状態についての知見を得た。

放流魚は 1 歳時に52尾、2 歳時に22尾、3 歳時に 5 尾が再捕された。放流時の平均全長は約25.0mmであったが、満2歳時には37.4mm、3歳時には54.0mmに成長していることが判明した。

放流された種苗は、放流直後の 1 カ月間には放流点周辺で再捕され、その後満 3 歳までの間には能登半島東北沖から東部沖の陸棚縁辺部や陸棚斜面での再捕が多かった。2 歳時の産卵期には産卵場近傍で 6 尾が再捕された。

産卵期に再捕された 2 歳魚 2 尾、3 歳魚 1 尾はいずれも成熟していなかった。

なお、本研究の詳細については、「栽培技術研究」27巻 1 号11-26頁、(1998年)に別途発表した。